中国抗戦時期文学と〝民族〟（六）

——武漢における「民族主義文学運動」の展開

阪口直樹

第一章　はじめに

「西山会議派」の「確定本党文芸政策」（一九二七年）や、葉楚傖・王平陵「三民主義文芸的建設」（一九二九年）、国民党中央宣伝部が召集した「全国宣伝会議」（一九二九年六月）で提出された「三民主義文芸政策」などを経て次第に明確化されていく国民党の文化政策は、「民族主義文芸運動宣言」（一九三〇年六月）以後展開される「民族主義文学運動」で本格化する。

この運動は上海でまず展開され、潘公展、範爭波、朱応鵬、黄震遐が『前鋒周報』（一九三〇・六・二三～一九三一・五・三）や『前鋒月刊』（一九三〇・一〇・一～一九三一・四・一〇）を拠点に活動を展開した。これに対して「左連」側は激しい攻撃を加え、例えば魯迅・瞿秋白・茅盾らは『文学導報』上で批判を展開したし、他方「左連」と論争関係（第三種人論争）にあった胡秋原も『文化評論』（一九三一・一）誌上で、一連の「民族主義文学」批判のキャンペーンを張っている。

これまでの文学史は、「民族主義文学運動」を完全否定と完全抹殺の態度でのぞみ、「〝左連〟の断固たる闘争は〝民族主義文学〟運動の本質を暴露させ、民衆のなかでその臭気がまき散らされた結果、完全に孤立し……、一年を経ずして国民党が苦心惨憺の上作り上げた〝民族主義文学〟運動は徹底的な破産を宣告された。」（『中国現代文学史』江蘇人民出版社　一九七九・八　一八〇頁）といった叙述を採用してきた。

だが、問題はそれほど単純ではなかった。というのはこの運動は国民党の派閥性と地域性という二つの原因によって、複雑な経緯をたどりながら継続的に展開されていったからである。

「左連」や胡秋原の批判によって壊滅した上海の「組織部系」（彼らの機関誌『前鋒周刊』『前鋒月刊』の廃刊は「左連」や胡秋原の批判より以前であった）の運動は、杭州においても、「黄鐘文芸社」の活動として継続展開され（『黄鐘』一九三一・一〇・三～一九三七・五）、一九三四年八月発行された『民族文芸論文集』（杭州正中書局　一九三四・八　上海書店一九八四・六　影印）はその集大成となった。

他方、「宣伝部系」の主力は南京にあり、王平陵を中心として「中国文芸社」が設立され、『文芸月刊』（一九三〇・八・一五～一九四一・二）を拠点に一〇年にわたる活動を継続して行ったのである。さらにこの南京での「民族主義文学運動」はその後武漢の文学活動に影響をあたえ、胡紹軒[注1]、魏紹徴[注2]主編の『文芸』（一九三五・三・一五～一九四八・三・一五）等を舞台に「民族主義文学運動」が展開されることになる。

こうして「民族主義文学運動」は、抗戦時期を通して無視できない一つの文学潮流を構成してきたように見える。蒋洛平の指摘はその意味で重要であろう。

三十年代から四十年代にわたり、〝民族文学〟は三回提唱された。一回目は「左連」が成立し、左翼文芸運動が大きな発展を獲得した時、二回目は文芸界抗日救亡運動と抗日民族統一戦線が澎湃として発展しだした一九三七年初、三回目は一九四二年前後の反共の高潮においてである。……これを〝民族文学〟〝発展〟曲線の三つのピークとみなすほうが、これをお互い無関係な三つの孤立した文学現象とみなすよりも、いっそう真実に近いであろう。(注3)

この〝民族文学〟の流れのなかで、武漢は第二のピークの時期に全国的な注目を浴びることになる。それは日中戦争の全面化が、武漢に作家の全国的組織である「文協」(中華全国文芸界抗敵協会)を成立させることになったからだが、かつての文学史はこの組織における左翼文学者の働きにのみ注目し、統一戦線を構成した「民族主義文学運動」派の動きと働きを無視してきた。だが、「文協」の重要な構成部分となった武漢の「民族主義文学運動」の経過をたどることによってこそ、当時の左翼作家と国民党系作家との共同と競合の様相が理解できるのではないだろうか。そのことを視野にいれながら私は本稿で、①抗戦時期以前における武漢の文学・出版状況、②武漢における「民族主義文学運動」の実態、③武漢「民族主義文学運動」派作家の左翼作家たちに対する態度、の三点を明らかにしたいと思っている。

第二章　抗戦前武漢の文学状況

武漢は現代文学の分野で、優秀な作家を生みだしてきた。例えば聞一多、沈従文、胡風、陳西瀅、凌叔華らがそう

だが、彼らは全国的作家であり、「武漢作家」という範疇には入らないだろう。抗戦前の武漢は、出版文化分野では上海・北京はおろか南京や広州よりも劣悪な条件にあり、「砂漠」であると比喩されたくらいである。[注4] だが出版活動や文学活動が全くなかったわけではないことは、当時の資料のなかでも明らかである。以下、項目別に簡単に紹介し、全体の様子をつかんでみよう。

（一）武漢の新聞及び副刊

出版といえば主流はやはり新聞であろう。抗戦前の武漢にはいくつかの有力な新聞があり、それらにはいずれも〝新聞屁股〟といわれた副刊欄が設けられ、文芸活動の場となっていた。このうち『武漢日報』（国民党中央宣伝部。社長王亜明、総編輯宋漱石）は蔣介石のクーデター（一九二七年）時代に創刊され、国民党中央宣伝部の支配下にあり、武漢における最大のマスコミであった。社長王亜明は文化運動の理解者で、文芸界にも影響は大きかったといわれる。副刊には《武漢文芸》（主編王任叔）、《鸚鵡洲》（主編段公爽）などがあったが、《現代文芸》（一九三五年二月一五日創刊で、一九三六年三月二九日に終刊、計九五期。凌叔華主編）も注目される。[注5] この他、『掃蕩報』（軍事委員会政訓処、主筆は陳友生）、『大光報』（社長は丁文安、発行人趙惜夢、主筆及び副刊責任者は陳紀瀅）、『新民報』（歴史の古い純民間紙で背景は不詳、有名な論説員に謝楚珩や陶滌亞）などがあり、『新民報』は宋泰生主編の副刊《空谷》が設けられていた。[注6]

（二）武漢の綜合雑誌

一方一九三六年三月一日発行『文芸』（第三巻五・六期）には、武漢最大の出版社である華中図書公司発行の雑誌広告

が掲載されていて、当時の綜合雑誌の状況の一端を伺うことができる。

華中図書公司総発行の五大定期刊物、『文芸』（武漢文芸社主編。本刊は文芸専門誌で、理論、小説、散文、戯劇、詩歌ジャンルは毎期すべて掲載する。国内外の作家が心をこめて編集した文芸愛好家必読書である）。『江漢思潮（月刊）』（華中の唯一の権威雑誌である。武漢江漢思潮社主編　漢口現代書局総発行）、『筆鋒（旬刊）』（湖北筆者連合会主編、本刊は武漢各著名作家が共同編集した雑誌で、毎期精確な評論、独特の見解が掲載され、筆鋒鋭く言論界を圧倒する勢いを持っている）。『西北風（半月刊）』（西北風社主編。本刊は武漢発行物のなかでもっとも精彩を放つ生活、思想、文芸関連の半月刊で、もっぱら国内外の著名作家のすぐれた作品を掲載し、人々に愛読される雑誌となっている）。『漢口商業月刊』（漢口市商会主編[注7]）。

このうち総合雑誌としての『江漢思潮（月刊）』については社団成立に関わった魏紹徴の証言がある。

そこでまず教育界に連絡して「江漢思潮社」を組織した。主脳人物は省民衆教育館館長王義周、省立師範学校校長向心葵、武昌芸専校長唐義精、教育庁主任秘書宋雪亭及び督学官の王介庵等で、王醒魂（略）がこれを補佐した。『江漢思潮』には各学校の優秀な学生からの積極的な投稿があり、掲載できないものについては、新聞の各「副刊」にまわした。当時かなりの学生たちは原稿料にたよって学業を続けており、例えば現在調査局長の阮成章は、当時は省立師範の傑出した青年作家で、その他書道家の李超哉（驊括）は中華大学に学んだ優等生であった。教育界と

大学の青年はこのようにして協同することになった。[注8]

（三）武漢の文芸雑誌

まず陽海清「抗戦初期武漢文芸刊物述略」[注9]をみると、抗戦初期における武漢発行の文芸雑誌として計三六種類があげられているが、そのほとんどが一九三七年の〝七七〟（七月七日）以後のものであり、外来勢力の流入が出版状況を急激に活発化させていることがわかる。そのうち〝七七〟以前に創刊されたものをあげてみると次のようになる。

(1)『文芸』（胡紹軒、魏紹徴主編　一九三五年三月一五日創刊）(2)『西北風』（一九三六年五月一日創刊）(3)『心血』（武昌心血文芸社編。一九三六年末から一九三七年初め頃創刊）(4)『青年文芸』（青年文芸社編輯、出版、発行。一九三六年二月創刊）(5)『夜航』（夜航文芸社編一九三七年一月創刊）(6)『奔濤』（王亜民主編兼発行、魏紹徴編輯一九三七年三月一日創刊）(7)『朝曦』（岳英、李子楣編、呉之帆発行、一九三七年四月創刊、一期のみで停刊）(8)『奔馳』（芳驥編輯。一九三七年五月一〇日創刊、終刊時期不明）[注10]

これら八種及びその他資料の中で発行期間や文化的影響力を勘案すると、主要な雑誌として①『文芸』②『奔濤』③『筆鋒（旬刊）』という三種に絞られてくるが、今その三種の性格を少し詳細に見てみる。

①『文芸』（一九三五・三・一五～一九四八・三・一五？）

この雑誌は「統計によれば、一九三七年以前に創刊された文芸刊物二種のうち、影響力がもっとも大きかったものとして、まず胡紹軒主編の『文芸』月刊と『文芸戦線』旬刊をおすべきであろう。」[注11]とされているものだが、その『文芸』

月刊に関しては『中国現代文学期刊目録彙編』（天津人民出版社 一九八・九 一六九頁）には次のように紹介されている。

『文芸』月刊は、一九三五年三月十五日武漢で創刊された。三十二開本で、「輪底文芸社」（一九三六年末に「武漢文芸社」に改称）出版、武昌の新生命書房と華中図書公司の発行であった。最初の二期は胡紹軒の編集で、第一巻第三期から第五巻第三期までは胡紹軒、魏紹徴の編集に変り、その後終刊までは胡紹軒の編集となった。一九三七年九月十五日から第五巻三期まで停刊され、一九三八年五月十五日の復刊号から第五巻五期に至って二度目の停刊をし、一九四七年七月一日再度復刊する。一九四八年三月十五日第六巻第三期を出して終刊を迎えた。該刊は巻数と期号数は連続しており、合計で六巻三二期を出版した。

該刊は創刊時、編集者は「民族精神を発揚し、中国固有の道徳を提唱し」、「三民主義文芸政策」を擁護し、民族主義文芸を提唱した。……抗戦勃発後、該刊の編集方針は明確な変更を示し、前後して「抗戦戯劇専号」「抗戦詩歌特輯」を特集し、多くの抗戦を訴える作品や文章を発表した。『文芸』月刊は、創作の発表を主とし、翻訳や評論も掲載した。投稿者には胡紹軒、邵冠華、曽今可、鴎外鴎、李蘇菲、楊邨人、蘇雪林、及び郁達夫、蔣錫金、趙清閣、王任叔、馮乃超、老舎、碧野、藏克家、鄒荻帆がいた。(注12)

②『奔濤』は王亜民が主編と発行を兼ねていた。魏紹徴の編集で、武漢奔濤半月刊社から出版され、上海雑誌公司と中国図書公司から発売された。一九三七年三月一日創刊であるが、第九期を発行して後、同年十一月に『文芸』と合併し、『文芸戦線』（旬刊）となった。これは武漢地区での〝七七〟抗戦勃発以前に存在した極めて少ない文芸月刊

の一つである。投稿者には胡紹軒、蘇雪林、魏紹徴、阮成璋、丁韜、趙景深、袁昌英、文治平、李青崖、呉其昌、朱全紀、馬耘砂、厳振開、万家達、劉念渠等がいた。

③『筆鋒（旬刊）』は湖北筆者連合会編集発行。一九三六年四月に武昌で創刊された。旬刊で、十月までに計八期を出して停刊した。一九三七年一月一日からは半月刊になり、巻・期をあらためて九月に第二巻三期を出して終刊となった。前後合わせて二一期を出した。該刊は綜合的雑誌で、たまに文芸評論や創作を掲載した。文芸思想面では所謂民族文学を鼓吹した、第五期には第一次文芸座談会記録を掲載し、「怎様建設民族文学」をテーマとして討論を展開したが、参加者には王亜民、丁韜、史紫枕、満濮誠、紫墟、羅夢石、呉慕風、費怒春、王道勝、曽雪齋、談瀛、沈儀琨、厳振開、胡紹軒等がいる。

抗戦前武漢における重要な期刊雑誌三種のうち、規模が最大で、影響力も大きく、発行期間も長かったものが『文芸』であったことがわかるし、これら三種の雑誌発行に魏紹徴と胡紹軒が深く関わっていたこともわかるのである。

第三章　武漢『文芸』と「民族主義文学運動」

前章で見たように、抗戦前武漢の文学界では『文学』が大きな影響力をもっていたことがわかるが、ここでは同誌の文章を通じて、「民族主義文学運動」がをどのように展開されたのかをみていきたい。その前に魏紹徴と胡紹軒が語っ

た同誌発刊のいきさつを紹介しておく。魏紹徴は『文壇先進張道藩』（趙友培著　重光文芸出版社　一九七五）の関係部分を引用しながら次のように証言する。

武漢文芸界の友人魏紹徴、呉若（慕風）、林適存、王道、王紹清、涂翔宇、史紫枕、甘運衡等は、早くも民国二二年（一九三三年）の春、南京文芸界の民族文芸運動に呼応し、まず民族文芸に関する原稿を大々的に募集し、続いて武漢文芸社を成立させ、武漢『文芸』月刊を出版した。彼らは国立武漢大学教授の呉其昌、袁昌英、蘇雪林、凌叔華、陳源（西瀅）等に、原稿審査と原稿執筆を依頼するとともに、小説の傅伯虎（後に清華大学から米国に留学した）、新詩の丁韜（原名は徐鑑泉。史紫枕の親友で彼らは当時隣り合わせの事務所で仕事をしていた）、シナリオの胡紹軒（彼は後に「文芸」の主編になり、彼が書いたシナリオはかつてソ連で翻訳された。抗戦時期は重慶で教育部戯劇教育委員会の職につき、抗戦勝利後は又武漢にもどり、武漢日報社の主筆となったが、大陸が奪われて後は、輾轉として昆明に至ったが、共産党に見やぶられ、殺害されたということだ）といった青年作家を育成したのである。(注13)

魏紹徴の回想は、武漢『文芸』が南京「民族主義文学運動」の直接的影響のもとで発行されたということで一貫している。だが、魏紹徴が「共産党に殺害されたということだ」とした胡紹軒は最近大部の回想録『現代文壇風雲録』を出版しその健在ぶりを示したが、そのなかに「『文芸』月刊出版始末記」という文章が掲載されており、その内容は魏紹徴とは若干ニュアンスが異なる。

一九三四年、私が湖北省立実験学校で教鞭を取っている頃、同僚の武漢大学卒業で英語担当の項震東と知りあった。我々二人とも文芸の愛好者だったから、文芸雑誌『蒺藜』を創刊したが、ただ四期を出版しただけで停刊してしまった。同年、湖北国民党省党部宣伝処の総幹事であった魏紹徴が、数人の文芸を愛好する青年と一緒に、文芸雑誌『輪底文芸』を出したが、二・三期を出版しただけでそれも停刊したのだ。一九三四年中に二つの雑誌はいずれも財政問題が厳しくて継続発行が不可能となったが、一九三五年春、魏紹徴は実験学校まで私を訪ねてきて相談をした。経費は彼が持ち、省の党支部から補助を受けるから、私と一緒に一つの文芸雑誌を出さないか、さらに「武漢文芸社」を組織し、彼が総務部の責任者で私が編集部の責任者になってはどうかということであった。(注14)

武漢文芸社とその出版物の性質は、正確には〝国民党とその関係者が援助した民間の社団であり、民間の出版物である〟というべきである。国民党やお上の財政的援助を受けたが、それは絶対に南京の「中国文芸社」やその出版物である『文芸月刊』とは異なっている。武漢文芸社と『文芸』月刊の特徴は、一、国民党支部の所轄機構ではなかった。二、経費は実費支給であり、出した手当が足らなくても追加されることはなく、年度ごとの予算決算はなかった。三、職員は専任はなく、党支部とは隷属関係にはなく、党からの職員の派遣は受けなかった。……もしも『文芸』を〝国民党が経営した刊物〟であるといいなすならば、それは不適切であり、正にそれが基本的に民間の性質であったがために、当時かなりの左翼作家や進歩的な人が『文芸』に原稿を書くことを希望したのである。該社と編集者は純粋に友人関係であり、党派や政治問題にわたることはなかった。(注15)

魏紹徴が国民党の文化活動の構成部分であると位置づけ、「民族主義文学運動」との関係を強調しているのに対して、胡紹軒は財政的援助は受けながらも、自主的な文学活動であったことを強調し、「民族主義文学運動」について触れていない。それは一面では文学愛好者としての胡紹軒と、国民党官僚としての魏紹徴の立場の差を表しているかもしれないし、回想した場（魏紹徴は八〇年代台湾であり、胡紹軒は九〇年代中国）の違いによるのかも知れない。時空を隔てた回想が、事実との隔たりをうみだすことは日常的な現象ともいえ、彼らにのみ頼って事実を再構成することには危惧が残されよう。

ここに「民族主義文学」が武漢『文芸』でどう展開されたかを、具体的に見て行く必要性がある。幸い、『中国現代文学期刊目録彙編』（天津人民出版社一九八八・九）には「『文芸』（武漢）目録」が収録されているが、そのなかで理論性と時事性の強い関連文章を拾い出してみると次のようなものがある。それらを各年代ごとに分けて、その特徴を整理してみよう。

①康駒「文学青年的責任」（『文芸』第一巻一期 一九三五・三・一五）
②鄭兆元「関於民族文芸的探討」（『文芸』第一巻一期 一九三五・三・一五）
③丁東「階級意識能克服民族意識嗎？」（『文芸』第三巻三期 一九三六・六・一）
④雄風「〝非常時期〟与〝文学〟」（『文芸』第三巻三期 一九三六・六・一）
⑤一怒「民族主義的文学略論」（『文芸』第三巻三期 一九三六・六・一）
⑥袁昌英「現階段所需要的文学」（『文芸』第四巻一期 一九三七・二・一）

⑦胡紹軒「民族文学題材論」（『文芸』第四巻二期　一九三七・二・一五）
⑧胡紹軒「民族文学的定義」（『文芸』第四巻三期　一九三七・三・一五）

この八本の文章は文学及び政治状況を考慮すれば、一九三五年三月のもの（①②）と、一九三六年六月時期のもの（③④⑤）と、一九三七年二～三月時期（⑥⑦⑧）の三部分にわかれる。

(1)一九三五年段階での論調

創刊号「論述」欄に掲載された二つの文章は、編者の「編輯後記」でも「本刊の読者は、決して軽視しないよう希望する！」とその重要性を強調しているように、該雑誌の立場を表明したものである。①康駒「文学青年的責任」の特徴は、左翼作家だけではなく現代派作家や小品文作家をも一括りにして鋭い批判の鉾先を向けていることだが、この視点は同創刊号の②鄭兆元「関於民族主義文芸的探討」にも見られ、『文芸』編集部の共通した状況認識のようだ。

該文は、「五四」以後中国の文学界が外国の資本主義的文化や社会主義文化を無批判に受入れたことに失敗の原因があるとし、「この悪現象が文芸界に影響したのが、ロマン主義的文芸とプロレタリア文学の流行であり、前者は個人的遊戯や繊細な技巧に流れるか、全くの個人的な享楽に変りさえした。後者はでたらめな宣伝、極端な感情的な扇動に流れ、第三インターのルーブルの奴隷になりさえした。これらの共通した結果は、均しく人々を思想の誤謬に陥れ、中国民族精神の発揚を抑圧し、その窮むるところ、中華民族の前途に重大な不利をもたらすのである。近年になって有識の士がこのことに考え及び、遂に〝民族文芸〟を提唱し、挽回策を講じようとしたことにより、今後我が国の文芸界の前途は必ずや大いに輝かしさを増すだろうことはいうまでもない。これはすなわち中華民族精神の発揚と中

華民族文化の建設に対しても、益するところ大きいのである。」と述べて、階級主義と商業主義に反対して〝民族文芸〟を提唱する理由としている。そして「民族文芸」の具体的内容については以下のように規定する。

文芸は最も直覚的に民族精神を表現できる最高のイデオロギーであり、それは単に民族精神の現実生活を反映する作用を有するばかりか、この現実生活を生き生きとその他の人々に感動させるばかりか、この民族危機に直面し、民族精神が萎えてしまった時期において、それぞれの文芸従事者が、もしも完全に民族の典型の最高の体現者であり、時代の雰囲気の最高の表現者であり、また時代の理知の最高の伝達者であるとするならば、その生みだすところの作品は、最も人を感動させ、啓発させ、人に共鳴作用をもたらせる必要があるのだ。消極方面では頽廃的なユーモアの雰囲気や表現を持たないということであり、積極方面ではわが民族の偉大なる精神と愛国的雰囲気を発揚することである。このような文芸であってこそ、「民族文芸」とみなすことができ、わが国民族の精神を発揚させることができてこそ、一般同胞をしてともに民族の滅亡を救う事業に立ち上がらせることができるのである。

文芸界の先駆者たち！文芸は時代の反映であり、我等は時代の巨大な車輪がすでに我われの一千万㎢の土地と、四億の人口を有する領土において最後の決定的なローラー作戦を展開しつつあるのだ。われらはさらに重大な覚悟を持ち、われらが民族の危機を救済する職責を果たすために、一層の団結をかちとり、ともに時代の要求に適応する民族文芸の建設に従事しよう！民族文芸をして文壇において輝かしい地位を勝ち取れるように、努めて浪漫派やプロレタリア文学の輩をしてわが国文壇からその痕跡をとどめなくさせねばならないのだ！

このように、彼らには文壇を、ロマン主義的陣営（＝現代派）とプロレタリア主義派（＝左翼陣営）及び民族主義文学派の三者鼎立として認識する見方を持っていたことが看取できるだろう。この点でいえば彼らの運動の綱領的位置にある「民族主義文芸運動宣言」（以下「宣言」と略、一九三〇・六）と若干の相違点があるようだ。今「宣言」の骨子を要約すると、以下の五点に整理できる。

①は状況把握の部分で、五四以来の文芸が旧文芸の解体と階級的芸術運動が生み出した極端な分裂状況のなかで危機的状態にあり、この危機を突破するために、中心意識の形成がなされねばならない。②は文芸の最高の使命が民族精神と意識を発揮することにあり、エジプト、ギリシャ、ゲルマンの国家や、ロココ、バロック、ルネッサンス等の様式等外国の例はその事を証明している。③は外国における民族主義の意義に関して述べ、ヨーロッパ各国の政治的自立は民族主義によって達成されたが、芸術的自立も民族主義に求めらねばならないとする。④は、民族主義は過去に形成された「民族意識」に表現されるが、同時に「民族国家意識」を新たに創造する必要があるとし、その現代的意義を強調する。⑤は、文壇の危機を、中心意識を形成し民族主義を喚起することで解決する。

この「宣言」には「プロレタリア文学」に対する敵意と、「中心意識」形成の主張という二つの具体的動機が組み込まれていたが、『文芸』創刊号になると敵対的目標が「ロマン主義的文芸プラスプロレタリア文学」に変化し、「中心意識の形成」から「民族的危機と団結の強調」へと変化していることがわかる。これは「左連」の成立（一九三〇・三）と日本の侵略が次第に全面化する状況の変化を反映しているものと考えることができる。

(2)　一九三六年段階での論調

こうした「民族」をめぐって、〝対決〟と〝団結〟の間を揺れる立場は、一九三六年の第二段階において一層明瞭に看取できる。⑤一怒「民族主義的文学略論」は、「中華民族の危機は、現在すでに重大化と深刻化の頂点にまで達した」との危機的認識を示しながらもその解決の方策としては「一つは外来の列強帝国主義を打倒すること！一つは国内の封建勢力と共産党勢力（赤匪）を殲滅すること！」というふうに、「共産主義勢力」に対する敵愾心がむきだしにされている。

だが注目する必要があるのは、彼らの論点が武漢という地域的に限定されたものではなくて、当時上海の左翼陣営の間で展開されていた「国防文学」の主張が意識されていたことである。例えば④雄風「〝非常時期〟与〝文学〟」を見てみよう。

『文学』三月号と四月号の論壇において、それぞれ〝非常時期の文学〟に触れた文章がある。彼らは次のように考えている。すなわち「しかしいわゆる〝非常時期の文学〟はすでに用語の矛盾となっている。というのは、ほんとうの非常時期になれば、文学は存在することができないし、必要もない」からだ。彼らはそこで「〝非常時期〟というこの用語を行動時期（すなわち戦争時期）に限定し、現在を〝非常時期〟の前夜であるとしか認識しない」。……ここから考えるならば、〝非常時期の文学〟というこの用語は、別に矛盾しているわけではなく、「文学論壇」のほうこそ矛盾してしまっているのだ。

また③丁東「階級意識能克服民族意識嗎？」も、雑誌『文学』と関係づけて自らの民族主義文学の主張を展開する。

『文学』五月号の論壇の最初の文章に次のようにある。「民族の敵に対しては当然憎むべきだが、敵の陣営で圧迫されたり騙されたりして戦争に参加している、労苦する大衆に対しては憎しみはない。憎しみがないばかりか同志としての真心でもって彼らを目覚めさせ、我々とともに共同の敵に反抗させねばならない。」これは共産主義者の主張である。彼らは階級意識が必然的に民族意識を克服するのだと主張する。

ここにいう『文学』とは、一九三三年七月に上海で創刊され、一九三七年十一月（第九巻四号）まで継続出版された、当時としては寿命のきわめて長く、影響力の大きかった雑誌であり、対外的には傅東華や王統照を雑誌編集者として前面に立て、茅盾が実質的な責任者となっていた。当時上海の文壇の代表的な位置にあった『文学』が、徐懋庸らによって主張された「国防文学」にどういう態度をとるかが注目されていた。

雄風が上記の文章で「《文学》三月号と四月号の論壇において」と述べたのは、傅東華が角の署名で書いた「所謂非常時期的文学」（『文学』第六巻三号一九三六・三・一）と、「再論所謂非常時期的文学」（第六巻四号一九三六・四・一）のことである。三月号所載の文章は『文学』が最初に「国防文学」について態度表明したものだが、「たとえ所謂〝救国文学〟や〝国防文学〟の中からほんのわずかの、鮮烈な表現をさがし求めようと希望したところで、依然として幻想である。」と結論づけたためか、「国防文学派」から非難を浴びてしまった。そのため傅東華（角）は主として徐懋庸（国防文学派）に的を絞って反論を試みたものが四月号の文章ということになる。

また丁東の「《文学》五月号の論壇の最初の文章」というのは、波「需要一個中心点」（『文学』第六巻五号一九三六・五・一）のことだが、これは実は茅盾が国防文学の立場に転換してその主張を闡明にしたものである。丁東の引用部分に引き

続いて明確に「国防文学」を主張したものだ。

そして、現在すでに一つの潮流となっているところの、この質問に対する回答は、外でもない、〝国防文学〟なのだ！……これは民衆に、国防に対して注意をよびかける文学である。これは敵の武力的、文化的な侵略を暴露する文学である。これは一切の意気沮喪し屈伏する漢奸理論を排除する文学である。これは民衆の情熱と英雄的行為を歌いあげる文学である。……だが、これらすべての題材には一つの中心思想を持つべきであり、即ち民衆の〝国防〟に対する認識（民衆に、最高の意義をもつ国防を理解させる）を高めることであり、民衆の抗戦の決意を促進することであり、すべてが一致して、侵略に対し武力で抵抗する行動をやりとげることである！

これは歴史が与えたところの、我が作家達の現段階における、避けるべからざる使命なのだ！

茅盾自身の回想によれば「私にこの二篇（「需要一個中心点」と「進一解」）を書かせた、別の原因は、一つには、傅東華の文章がすでに論争を引き起こしており、しかも傅の文章のいくつかの論点は、根拠を失っていたから、私が出ていって場を収めて、傅東華を舞台から下ろしてやる必要があったのだ。二つ目は、『文学』の読者が、手紙を寄こし、〝国防文学〟問題を問いつめ、編者に回答を要求しはじめたことであった。」

このように『文学』で展開された「非常時期的文学」の主張は、上海において国民党をも共同の対象に組み込もうとした「国防文学」の運動が、急激に盛り上がりつつあった状況の一つの側面であって、武漢の『文芸』がそれに対する対応を迫られていたことを表現したものと考えることができるのである。(注16)

(3)一九三七年段階における論点

第二段階において、左翼陣営に対する敵愾心を燃やしながらその対応を模索していたとするならば、第三段階の一九三七年においては状況がかなり異なっているといわねばならない。『文芸』第四巻一期は表紙に「民族文芸専号」を謳うなど、「頽廃派・肉感派・漫罵派及び唯我独尊のプロレタリア文学」に対して、強い対抗的意識と糾弾や非難を示している点は以前と変りないが、社会状況の変化に関しては敏感に反応している。例えば⑦袁昌英「現階段所需要的文学」を見てみよう。

この二三年来、国家が民族生存を勝ち取る奮闘の中ですでに、相当な基礎を打ち立てることが出来たために、またかなりの人々が危険な国の将来に対して、覚悟を固め、方策を立てたために、初めて民族文学の提唱を復活させたのである。……この全民族が自立の道を闘いとる潮流のなかで、異民族に対する迎合をこととし、自己の民族・文学に対する攻撃と漫罵をこととし、嫉妬・殺人文学に対する奨励をこととするやりかたは、もはやそうながく我々の文壇を独占することは不可能となっている。……

我が国には人格高潔で、気節忠烈な民族的英雄、例えば文天祥、史可法、馬援、岳武穆などがいる、……我々はどうして彼らの事跡を宣揚して、青年を感動させる偉大な作品を創造しないのだろうか？我が国にはいくらも同情、勤労、朴実、忠義という、また詩文を愛し、愛芸術を愛し、和平を愛する……美徳がある、我々はどうしてこれらを題材にして、青年を向上させる文芸を創造しないのだろうか？

これは内容的には左翼の「国防文学」の論とほぼ重なった議論であり、国民党系作家の側から民族的危機に立ち向かうために「民族統一」や「国共合作」への積極的なイニシアティヴを取れる条件が整い始めていることを示しているようだ。

一九三七年三月七日に漢口の「武漢日報社」において、「いかにして民族文学を建設するか」をテーマとして「湖北筆会第一次文芸座談会」（「筆会」は「筆者連合会」のこと）が開催されている。座談会の中心人物であった胡紹軒は、⑨「民族文学的定義」を書いてその紹介をしている。

本筆者連合会はかつて十数人の頭脳を集めて開催した文芸座談会において、「民族文学の定義」について議論を進め、次のように議決した：「中華民族を向上させ啓発させ、また世界各弱小民族の自決を援助する文学こそ民族文学なのである。」私はこの定義は、確かに成立すると考える。というのはこの定義は、対内的なものと対外的なものという二つの意義が含まれているからだ。対内的には「中国における自由平等を求めること」であり、対外的には「平等の立場で世界と連合し、我が民族と共同で奮闘する」ということである。もし後者がなければ、民族文学が国家主義あるいは帝国主義の文学に変質してしまうであろうし、もし前者がなければ、わが民族が独立生存できず、どうして世界の各弱小民族の「自決」に援助することができようか？……さらに前に引いた「民族文学の定義」について言えば、その包含する最大の目的は二つある、一つは我が民族の向上であり、一つは各民族の自決である。前者はわが民族を世界のなかで永遠に存在可能とさせ、後者は全世界を大同に向かわせるのである。

胡紹軒は⑧「民族文学題材論」において、さらに民族文学そのものの対象と題材について自己の主張を展開している。

所謂「民族文学」は、その内在的な価値と広範な範疇を備えている。例えばある民族の優美な道徳を発揚させたり、ある民族の卑劣な民族性を改善させる作品も、民族文学である。……「根本的に治癒させる」方法はやはり、「民族の優美な道徳を発揚させ、卑劣で懦弱な民族的心理を改造させる」面にある。……だから、この墓（欠点のこと――引用者）をあばきだし、中華民族を復活させられる全ての文学こそ、真の民族文学である。この種の文学の題材も、ほかならぬ民族文学の主要な題材なのである。

以上見たように、武漢における「民族主義文学」の主張は、二年間にわたって継続的に展開されたが、当初強く見られた他の流派に対する露骨な対抗意識や独自性の主張から、民族の危機感の強さが前面に打ち出され、大同団結の強調へと変化していることがわかる。内容的にも上海での「国防文学」と一致した面を持っており、これは国民党側からも、「民族合同」、「国共合作」の条件づくりが進行していたことを証明しているといえるだろう。

その後半年ばかりの停刊を経過して、復刊した『文芸』に掲載された邵力子「復刊詞」（『文芸』第五巻四期一九三八・五・一五）は、「民族文学」から「抗戦文学」への質的転換がすでに行われたことを宣言したのである。

これは武漢文芸社が出版する文芸月刊の第五巻第四期であるが、実際には六ヵ月の停刊後改めて復刊した第一期

でもある。当時の停刊は、当然やむを得ないものであったし、わが国の対日抗戦の第一段階において、失敗する運命も避けられず、社会上での各種の弱点も噴出することを免れなかった。この三年半にもわたり出版が継続され、武漢文芸界において重要な地位を占めてきた文芸月刊も、印刷上の困難によって停刊を余儀なくされたのである。……幸い我が国は抗戦の第二段階に突入して、我々はすでに、全国一致団結した奮闘によって、確かな手ごたえを見い出した。そこでこの停刊久しい、文芸月刊も抗戦必勝・建国必成の信念がいや増すなかで、武漢文芸社同人の努力と各方面の賛助の中で、今日復刊することになった。これは何と喜びに値することだろうか！

本期の内容は停刊以前の各期と比較して、どれほどの違いがあるかは読者がおのずと識別できるであろうし、贅言を要するまでもない。勿論、過去は民族文芸理論の建設と民族文芸作品の推薦に重点を置いてきたが、今後は努めて力を抗戦文学の展開に合せて、そこからさらに真に建国の事業とともに協力する文学へと進む必要があるだろう。ここで特に提起するに値するのは、本刊が復刊される一個月余り前に、中華全国文芸界抗敵協会が成立し、中華全国の文芸工作者が共に国難に赴き、誠心誠意、一致団結したことを明確に示したことである。今日の武漢は、すでに全国文芸界統一の中心となったのであり、今後の本刊も、単に武漢文芸社の出版物としてではなくて、全国文芸工作者が共に血と汗によって灌漑する田地とならねばならない。

第四章　まとめ――「民族主義文学」から「抗戦文学」へ

武漢の「民族主義文学運動」派は、一九三五年段階から着実に勢力を蓄え、『文芸』や『筆鋒』を拠点に文学活動

を展開してきた。そして当初は南京の「民族主義文学運動」派の影響の下で独自の活動を展開してきた、といえる。

だが、一九三六年段階になると、国難の緊迫化にともない、上海の左翼文学界で「国防文学」の提唱が行われ、さらに「国防文学」論争へと発展するが、こうした民族的危機感は武漢にも波及し、「国防文学」に対して敏感に反応した文章も発表される。そして一九三七年段階になると、「民族主義」文学を抗戦時期に適合させる方向がさぐられていくとともに、新たな状況下における主導的地位獲得のための行動が起こされることになり、武漢在住作家七五名が発表した「武漢文芸作者共同宣言」（以下「武漢宣言」と略、『文芸』第四巻一期　一九三七・二・一掲載）に結実したのである。ちなみに署名者のリストを以下にかかげておく。

史紫忱、丁韜、沙家鼎、熊壽農、陶滌亜、謝蒨茂、邵冠華、陳紀瀅、孔羅蓀、梁韜、馬鳴塵、朱銘仙、程仲文、鍾期森、魏紹徴、蔣銘、唐性天、賀嶽僧、林栄葵、何夢雪、范永炎、謝澄宇、揚虔洲、蘢取直、段公爽、范鴻漸、厳振開、廖応鍾、王禪、唐振吾、朱光璉、李文開、傅毅、沙蕾、姚亜影、胡紹軒、張西培、羅夢石、夏学周、周文化、洪薇、皮侠鳴、費怒春、王亜明、蕭小野、王道勝、陳嗣音、戴天道、趙磊、張克明、沈岳生、洪野、計南昭、李家斌、王承曽、黄人鳳、呉若、魏沙、石磊、周輝鶴、張正鵠、田少常、馮騰、楊徳明、秦兆陽、田寄実、劉宛平、陳振望、宋文光、熊峻峯、宋元、麗沙、楊春波、李任子

ここで彼らが主張したものは、民族的危機における民族の統一ということであり、そのための作家の役割についてである。「武漢宣言」は次のように述べる。

「民族第一」のスローガンの下で、必ず民族組織の健全、民族力量の統一、民族精神の発揚を求めることによって、はじめて外敵を防ぎ民族の自立を図ることができる。だが、漢奸と匪賊の活動は民族的利益と全く相反するのである。彼らの唯一の目的は民族組織を破壊し、民族力量を分散し、民族精神を打ち砕くことである。彼らは民族生命の雑菌であり、彼らは民族生命をそこない、自己の醜い生活を維持しようとする。だから我々の目前の急務は、まずわれわれ自身の雑菌である漢奸や匪賊を取り除き、防御的力量を建て直す必要があるのだ。だから生活面において、我々は三民主義を遵守する現政府こそ全民族の力量を統一することができ、全民族の力量を指導し抗敵の戦争を行なうことができ、民族の輝かしい生存と自由を求め得ることができるのである。

ここには「民族第一」による統一の論理と「漢奸残匪」による排除の論理が混在しているのがわかる。つまり「漢奸残匪」に左翼的作家が含まれたとしたら、民族的統一が可能なのかどうかが問題となるからである。事実、この時期においては共産党系の運動に対する拒否反応は極めて強いものがある。「武漢宣言」には次のような表現もある。

そこで、左翼作家の態度は突然変ったのだ。この態度変化の動機は、一方では自分たちが民族的な渦潮による打撃を受けたことによるが、他方では共産分子（赤匪）残存者の政治戦略を反映したからでもある。というのは残存共産分子自身が前途の目標を失ったと同時に、第三インターの命令を受けて、所謂階級闘争を民族革命に改め、またソビエト政権を人民戦線に改め、また殲滅のスローガンを連合のスローガンに変えたのである。そこで、左翼作家は「統一戦線」「国防文学」を叫びだしたのである。おおまかにいえば、彼らはいくらかは目覚めたように見え

るが、上に述べたものは単に彼らの煙幕にすぎず、彼らが実際に念頭にあるのは、時代の流れを利用して自己の没落をまぬがれようとし、民族の隊列を歪曲して、この時代に唾棄された理論を紛れこませようとしているのである……。

これは極めて残念なことである。だから文芸上で我々は民族と利益に反するプロ文芸や変更後の「国防文学」、「民族革命戦争の〝大衆文芸〟（ママ）」に対して、我々は「民族文芸」だけが時代を反映する唯一の文芸路線であると主張するのである。

彼らは左翼陣営によって提唱された「国防文学」や「民族革命戦争の〝大衆文学〟」には反対の姿勢を鮮明にし、それに「民族文芸」を対置していることがわかる。だが、全体としてみるならば、「赤匪」を漢奸や残匪と全く同一視していないこともわかるだろう。だとするならば、武漢の作家たちは、左翼文学陣営とは異なった方向からの民族統一の方向をさぐり主張しようとしたと考えるのが自然ではないだろうか。

こうした武漢在住の作家たちが合同して実践行動に歩みだす動きは、この後も継続して展開されたが、「宣言」直後の一九三七年三月七日、「いかにして民族文学を建設するか？」をテーマとして武漢日報社で開催された「湖北筆会」第一次座談会（「湖北筆会第一次文芸座談会紀録」『文芸』第四巻三期　一九三七・三・一五掲載）もその一つの取り組みであった。(注17)

こうした武漢在住の作家たち行動は、一九三七年後半時点になると、全国各地から作家（左翼作家を含む）の流入によって、その受け入れと対抗の対策に追われて行くことになる。例えば魏紹徴は、その経過を次のように証言して

いる。

この年〝八一三〟淞滬抗日戦争が勃発すると、政権中枢の重心は次第に武漢に移り、大武漢防衛の闘いもここから次第に活発化した。そして上海の〝左連〟分子も、大量に武漢に押し寄せてきた。例えば胡風、聶紺弩、柯仲平、穆木天、彭芳草、蕭軍、蕭紅等は、顔中真っ赤に塗りたくって、共に国難に赴くという名目だが、腹には別の目的を持っていた。彼らは到着するや、文芸社といったものをでっちあげようとしたり、後にはさらに編集者に対する援助を組織化しようとしたりした。我々は彼らに〝箍〟をはめようと、積極的に彼らと連絡を取り、〝不分化大団結〟のスローガンを提出し、武漢文芸界抗敵協会を共同で組織するよう呼びかけたので、彼らも別の動きができなくなったのである。(注18)

一九三七年十月三〇日、武漢文芸界抗敵協会が成立した。成立大会において推挙された主席団は、劉炳藜、王亞明、陳紀瀅、馮乃超、穆木天、彭芳草び筆者（注魏紹徴）で、我が方が多数であった。選出された理事も、当然わが方が多数であった。事実は我々に語っている、武漢は上海とは比べようもなく、たとえ彼らに少しばかり虚名があろうと、本当に文芸工作を推し進めようとすれば、横槍などさしはさむことなどできず、我々について進むしかなくなるのである。(注18)

ここで魏紹徴が述べている、国民党系作家の主導権のもとで「武漢文芸界抗敵協会」が結成され、彼らの圧倒的優勢のもとで左翼作家を糾合したということは、武漢在住作家のそれまでの活動の基礎があったということを裏付けて

いるのである。これはこれまで中国文学史の、共産党と左翼作家の主導で民族統一の運動が展開されてきたという叙述とかなり様相を異にするといわねばならないが、魏紹徴の証言の正確性についても吟味が必要かもしれない。例えばここで指摘している「武漢文芸界抗敵協会」にしても、他の資料からその存在を確認することができないのである。今「抗戦初期武漢文芸活動大事記（一九三七・七・七～一九三八・一〇・二五）」(注19)を見ると、同時期の関連事項は次の三点ある。

①一九三七年十月六日　国民党湖北省和武漢市党部挙行来漢文化人招待会、国民党中央宣伝部長張道藩主持。

②一九三七年十二月十九日　「武漢文化界抗敵協会」成立、選挙段公爽、胡風、魏紹徴、朱双雲、光未然等廿五人為理事、柳湜、胡繩、沈茲九等七人為候補理事。

③一九三七年十二月三一日　「中華全国戯劇界抗敵協会」成立、通過宣言和決議、選挙田漢、陽翰笙、張道藩、唐槐秋等九七人為理事、定毎年一〇月一〇日為〝戯劇節〟、在第一次理事会上、推挙田漢、方治、朱双雲等廿五人為常務理事。

魏紹徴の回想には、自らが理事となった筈の②「武漢文化界抗敵協会」が一言も触れられていず、「武漢文芸界抗敵協会」と記憶違いを起こしたと考えたほうが自然であろう。ちなみにこの「武漢文化界抗敵協会」について、別の資料で補足しておこう。

【武漢文化界抗敵協会】

一九三七年十二月十九日に国民党漢口市党支部講堂で成立し、葉溯中、劉伯閔、李公樸ら各文化団体代表と、魏紹徴、陳友生、段公爽、陽翰笙、胡風等一〇〇人余りが出席した。該協会は次のように宣言した。「本会は武漢文化界に組織を持つ、すべての文化団体が本会の工作に参加することができ、それでもって抗敵の力量を集中し、抗敵の陣線をうちかためようとするものである」と。該会は国際工作宣伝委員会（委員は陳友生、金仲華、金則人、丁文安、胡繩等十五人）、教育工作委員会（委員は王鏡清、季平、呉亮夫等二二人）、電影工作委員会（委員は袁叢美、史東山、応雲衛、陳波児等十七人）、出版工作委員会（委員は鄒韜奮、張仲実、潘梓年、張申府等三一人）、文芸工作委員会（委員は胡風、馮乃超、老舎、葉聖陶、艾青、田間、高蘭、蕭軍、蕭紅、東平等三六人）、音楽工作委員会（委員は洗星海、馬絲白、張曙、安娥等二一人）を設置した。また該協会は段公爽、胡風、鍾期森、何夢雪、魏紹徴、劉炳藜、陶滌亜、光未然、彭芳草、謝楚路、羅夢石、馬絲白、謝倩茂、徐歩、梁韜、林栄葵、李彦常、王鏡清、鄭峻生、朱双雲、管雪斎、馮乃超、宋一痕、金則人等二五人を常務理事とし、柳湜、胡繩、金仲華、孟憲章、李平、陳友生、陳茲九等七人を候補理事とした。

該会は成立後、八三の文化団体がそれに呼応して加入し、その後さらに戯劇工作委員会、戦地工作委員会、救済慰労工作委員会、農村工作委員会等の機構を増設することになった。(注20)

この「武漢文化界抗敵協会」の常務理事及び候補理事三二名のメンバー構成を見ると、さきの「武漢宣言」署名者が比較的多いことに気が付く。例えば魏紹徴以外に、段公爽、鍾期森、何夢雪、陶滌亜、羅夢石、梁韜、林栄葵がそうであることがわかるし、丁文安は『大光報』社長で、陳友生は『掃蕩報』の主筆であった。こうみると魏紹徴のい

う、武漢在住作家（民族主義作家）が多数であったという発言もあながち誇張とはいえないことがわかるのである。

ところでこうした武漢在住の作家は、その後武漢が一つの地域から、全国の文化活動の中心地となることによって、新たな対応を迫られていく。彼らは南京からの国民党系作家と共同して、左翼作家との熾烈なヘゲモニー争いを展開し、武漢という地域的性格の濃い「武漢文化界抗敵協会」から、「中華全国戯劇界抗敵協会」（一九三七・一二・三）を経過し、「文協」という全国的組織の結成へと流れ込んでいったのである。最近の文学史『二十世紀両岸文学史』は、「文協」における「民族主義文学運動」の積極的意義を限定付きで次のように評価し叙述している。

〝七七事変〟後、政治面で第二次国共合作が実行され、抗日民族統一戦線がうち建てられた新たな状況と呼応して、文芸界においても空前の大連合が実現したのである。一九三八年三月二七日武漢で成立した「中華全国文芸界抗敵協会」（略称「文協」）は、全国的規模における文芸界抗日民族統一戦線組織であった。……上述の「文協」を構成した組織メンバーから見て、「文協」はすべての愛国的作家を包括する最も広範な抗日民族民族統一戦線組織であり、三十年代の三大文学運動（すなわちプロレタリア文学運動、国民党ファシズム「民族主義文学運動」、ブルジョア・プチブルジョア文学運動）の新たな形勢下における大合流である。(注21)

（注）

（1）胡紹軒（一九二一・二・二〇～）。原名は胡漢華、号は紹軒。湖北省大治県出身。筆名は華露、戚仙、少仙、邵仙、呉寒花、胡紹軒、紹軒、丁亥、老紹などがある。一九三五年に『文芸』を武昌で創刊し主編となったり、「文芸戦線社」を起こして『文芸戦線』の編集にあたる。後に五〇余人を結集して演劇集団「鉄馬劇社」をおこし、張道藩の「最後関頭」、胡紹軒の「盧溝橋」や街頭劇等を上演した。抗戦時期には重慶で教育部戯劇教育委員会で勤めたが、抗戦勝利後武漢にもどり、武漢日報社主筆となる。最近重慶でかつての文学活動を『現代文壇風雲録』（重慶出版社 一九九一・一二）にまとめて出版した。

（2）魏紹徴（一九〇九・六・一～）。筆名に韶蓁、魏韶蓁があるが本文中はすべて魏紹徴に統一した。湖北省の黄岡出身。国立武昌師範大学、中央軍事政治学校第六期卒業。高等学校時代から小説と戯劇創作を始め、その後武漢『文芸』月刊、『奔濤』半月刊を創刊し、『中国青年』を編集するなど文学活動に従事する。その他湖北中山日報社社長、成都中央日報社社長、湖北省政府新聞処処長、中央宣伝部科長、同処長代理、監督室主任、中央文化運動委員会委員及び設計委員を歴任する。著書に『発揚重慶精神』、『駿痕集』がある。

（3）「関於〝民族文学〟――一個備忘的提綱」『重慶師範学院学報』哲学社会科学版一九八三年四期 一頁。

（4）王鳳「抗戦前三十年代武漢文芸界状況綴拾」『武漢文学芸術史料第一集』武漢市文連文芸理論研究室編 内部発行 一九八五・九 一七五頁参照。

（5）執筆者は総勢七〇余名にのぼり、沈従文、兪平伯、巴金、戴望舒、蕭乾などの名もみえる。唐達暉著「《現代文芸》総目及有関資料」上掲『武漢文学芸術史料第一集』一八八頁参照。

（6）『復興日報』（国民党特務組織発行）、『市民日報』（国民党漢口市党部の単成儀発行）、『大同日報』（国民党湖北省党部発行）、

『公論日報』（民間発行）、『時代日報』（民間発行）、『華中日報』（民間発行）などの新聞は抗戦前から抗戦初期にかけてすべて停刊し、『武漢日報』と『掃蕩報』が継続的に発行を行なったという。

（7）『文芸』第二巻五・六期合刊　一九三八・三・一の広告より。

（8）魏紹徴「在奔騰的波濤中同舟共済」『抗戦時期文学回想録』文訊月刊雑誌社　一九八七・七・一　二九頁。

（9）『近代史資料』総七八号、中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯部編　主編章伯鋒、副主編庄建平　一九九一・二　所収。

（10）この他、一九三五年から三八年にかけて、武漢文芸界で小さな同人週刊誌『小意見』が出された。参加したのは武漢市国民党部の宣伝担当であった何夢雪、王禅や『武漢日報』の段公爽、『掃蕩報』の蔣銘、鐘期森や程暁華、さらに『大光報』の陳紀瀅や孔羅蓀、また劇作家呉慕風（呉若）等が参加した。

（11）章紹嗣等『武漢抗戦文芸史稿』長江文芸出版社　一九八八・九　二〇五頁。

（12）戦時旬刊『文芸戦線』は一九三七年二月三日に『文芸』月刊と『奔濤』半月刊が合併して出来たものである。

（13）魏紹徴「在奔騰的波濤中同舟共済」上掲『抗戦時期文学回想録』二六頁。

（14）上掲『現代文壇風雲録』重慶出版社　一九九一・三　二七五頁。

（15）同上書　二六五頁。

（16）茅盾・傅東華と『文学』、「国防文学」の関係については、拙論「《文学》と茅盾――国防文学論争にかかわって」『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』汲古書院　一九八六・三・三で詳細に論じたことがある。

（17）参加者は　王亜明、丁韜、史紫枕、万濮誠、紫墟、羅夢石、呉慕風、費怒春、王道勝、管雪齋、談瀛、沈儀混、厳振開、胡紹軒である。

(18)「在奔騰的波濤中同舟共済」上掲『抗戦時期文学回想録』所収　一三頁。

(19)上掲『武漢文学芸術史料第一集』三頁。

(20)河池「抗戦初期武漢文芸社団概述」上掲『武漢文学芸術史料第一集』所収　四頁。

(21)張毓茂主編『二十世紀両岸文学史』遼寧大学出版社　一九八八・八　五九頁。

（複写不能の『文芸』の一部の文章は、中国社会科学院胡士雲氏に手抄をお願いした。）